

## 緩和ケアチーム 抄読会

慶應義塾大学 一般・消化器外科 島田理子

Association between palliative chemotherapy and adult cancer patients' end of life care and place of death: prospective cohort study

Wright AA, Zhang N, Keating NL, Weeks JC, Prigerson HG.

BMJ 2014; 4 March Published online

### 【背景】

20 から 50%の患者は終末期に化学療法を施行されている。終末期の化学療法を施行しないことで患者の QOL や費用の面でも改善することが見込まれるが、化学療法の中止をいつ決定するかは難しい。

### 【目的】

癌患者が終末期に化学療法を行うことで死を迎える直前に集中治療を要する割合や終末期の療養場所にごどのように影響するか調べた。

### 【方法】

- ・ 試験デザイン：米国の 8 施設における進行癌患者を対象とした前向き多施設縦断的研究
- ・ 患者：少なくとも 1 つの化学療法施行後に病気の進行を認めた患者で、医師により予後が 6 か月以下と診断された患者。
- ・ 評価項目

Primary outcome: 死亡 1 週間以内の集中治療の有無（心肺蘇生、呼吸器管理の有無等）、死亡場所

Secondary outcome: 生存期間、死亡直前のホスピスへの入所、死を迎えたい場所でむかえることができたか。

### 【結果】

本試験には 386 名の患者が参加し、生存期間の中央値は 4.0 か月（1.8-8.3 か月）であった。試験登録時に 56%の患者は姑息的な化学療法を受けていた。

#### ・ 患者背景

姑息的な化学療法を受けていた患者は化学療法を受けていない患者と比較して緩和医療よりも延命治療を受けることを希望していた（36%VS 26%, P=0.01）。

姑息的な化学療法を受けている患者は自身の病気が終末期であることを認識していないことが多く

（35% VS 48%, P=0.04）、医師とも終末期をむかえるにあたっての自身の希望を相談できていないことが多かった（37% VS 48%, P=0.03）。

#### ・ 終末期の治療内容

姑息的な化学療法を受けた患者では死亡直前の 1 週間に心肺蘇生や人工呼吸器管理をうける割合が多かった（14% VS 2%）。姑息的な化学療法を受けた患者では、死亡直前の 1 週間の経管栄養の使用が多く

(11% VS 5%)、ホスピスへの入所が遅くなるが多かった (54% VS 37%)。

- ・ 生存期間

姑息的な化学療法の有無による生存期間の差は認めなかった。

- ・ 終末期の集中治療の有無、療養場所

試験登録時に姑息的な化学療法を受けている患者では姑息的な化学療法を受けていない患者と比較して ICU で死亡することが多く (11% VS 2%) 在宅での死亡例は少なかった (47% VS 66%)。

姑息的な化学療法を受けている患者では自分の望んだ場所で療養している割合は少なかった (68% VS 80%)。

### 【考察】

本検討では死ぬ約 4 か月前に終末期に化学療法を行うことで死亡直前の集中治療を受けるリスクが高くなり、ICU での死亡のリスクも高くなることが示唆された。

- ・ 他試験との比較

本研究では今まで報告されている結果とも同等に半数以上の患者は化学療法により 1 週間でも延命できるのであれば化学療法を選択することを望んでいた。本試験では終末期に化学療法を断念するタイミングに関して施設ごとに差を認めたが、その差を補正している。施設ごとにどのような差があるかを解析することで、化学療法の中止に最も寄与する因子がわかるかもしれない。

- ・ 本試験の limitation

本試験に参加した患者について化学療法を最終的に中止したタイミングに関する情報がなかった。また、患者がどの時期にホスピスへの入所を希望するかに関しても情報はなかった。

### 【結論】

本検討では終末期に化学療法を行わないことで死亡直前の集中治療を受けるリスクは低くなり、終末期における QOL の改善が期待される。